

本資料は、「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

高校生の美術2 表紙作品・作家紹介

掌の鍵

赤い糸をつむぐ——塩田千春





高校生の美術2

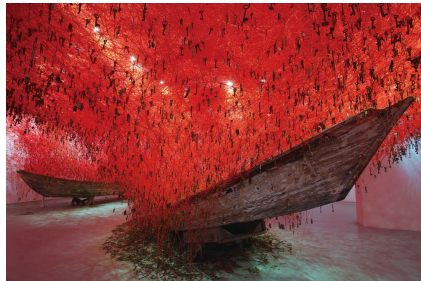
表紙:

掌の鍵 [古い鍵・糸・古い木船] 2015

ヴェネツィア・ピエンナーレ国際美術展での展示 [イタリア]

撮影: サニー・マンク

第56回ヴェネツィア・ピエンナーレ国際美術展の日本館にて。鍵、赤い糸、2艘の舟で構成されるインスタレーション空間と、鍵を乗せた子どもの掌の写真、生まれる前と生まれた直後の記憶を語る子どもの映像作品「どうやってこの世にやってきたの?」を組み合わせ構成されている。



掌の鍵における2艘の舟は、鍵が象徴する記憶を受け止める掌を表している。

撮影: サニー・マンク

「高校生の美術2」の表紙には、現代美術家である塩田千春さんが制作した「掌の鍵」という作品を大きく掲載しています。これは鍵、糸、舟などを空間に配置したインスタレーションで、個人の記憶や人と人とのつながりをテーマにした作品です。制作にあたって、塩田さんがどのように発想し、イメージを膨らませていったのか伺いました。

——言葉より先に「絵」があった

小さいころから絵を描くことが好きでした。幼稚園のときに描いた絵がまだ実家に残っているんですが、自分の名前すら満足に書けないころから、絵を描いているんですよ。人は文字を書く前から絵を描けるんですね。

具体的に美術に関わる仕事がしたいと思い始めたのは小学校高学年～中学生のころだと思います。自分はマテリアルの世界ではなく、もっと精神的な世界に行きたいと考えていました。そこで高校は大阪府立港南造形高等学校へ行こうとねらいを定め、明確に美術へと舵を切りました。無事入学したあとは、油絵ばかり描いていましたね。

——絵画からインスタレーションへ

大学では洋画科に進みましたが、1年次の早い段階で絵が描けなくなってしまいました。ただ描くことはできるんですが、理論で描いているんですね。画面を赤で塗ったら、ここに補色の緑を入れようとか、つつい頭で描いてしまう。描いても誰かの絵になってしまって、自分を表現できない。そこから半年ぐらい描けなくなりました。

どうして私は描くのか、どうして私は表現したいのか、そう考えるうちに、絵画以外の表現手段にも目が向くようになりまし。何かを得ようと大阪の国立民族学博物館に足しげく通う中、生活とアートが寄り添う世界各地の意匠や、お祭りの仮面などに興味をもつようになりまし。

自分でもつくってみたいと、ようやく創作意欲が湧いて、紙で仮面をつくり始めまし。2週間でつくった数は600個ほど。その仮面を、ざーっと並べてみたんですね。思えばそれが最初のインスタレーションでし。自分を表現する手段として、インスタレーションという方法があつたのだと気が付いたのは、まさにそのときだったと思います。



P37 | 身近な材料で表す:

DNAからの対話

[靴・毛糸・紙] 2004

日本美術技術センターでの展示 [ポーランド]

撮影: サニー・マンク

鍵のかかった部屋 [鍵・毛糸・扉] 2016
KAAT 神奈川芸術劇場での展示 [神奈川県]
撮影: (左) 高橋和海 / (右) 西野正将
掌の鍵を再構成した作品。帰国記念展。



塩田千春 (しおた・ちはる)

現代美術家

1972年、大阪府岸和田市に生まれる。大阪府立港南造形高等学校卒業。京都精華大学洋画科卒業。「生きることとは何か」、「存在とは何か」を探求しつつ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作する。2007年、神奈川県民ホールギャラリーの個展「沈黙から」で芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2015年、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館作家として選出される。国内の主な個展に、高知県立美術館(13年)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(12年)、国立国際美術館(08年)など。ベルリン在住。

Chiharu Shiota
<http://www.chiharu-shiota.com/ja/>



——瞬間で伝わる魅力

インスタレーション＝空間造形なので、人がその空間に入った瞬間、「わあっ！」と伝わるんですね。絵画や彫刻のようにゆっくりと、じわじわと伝えるような表現も魅力的ですが、作品を見たとき、一瞬で……まさに1秒とか2秒で人の心を鷲掴みにして、作品の中に吸い込んでいく。私にとって、インスタレーションという表現手段の魅力はそこにあると言っても過言ではありません。

——「掌の鍵」は、なぜ「鍵」だったのか

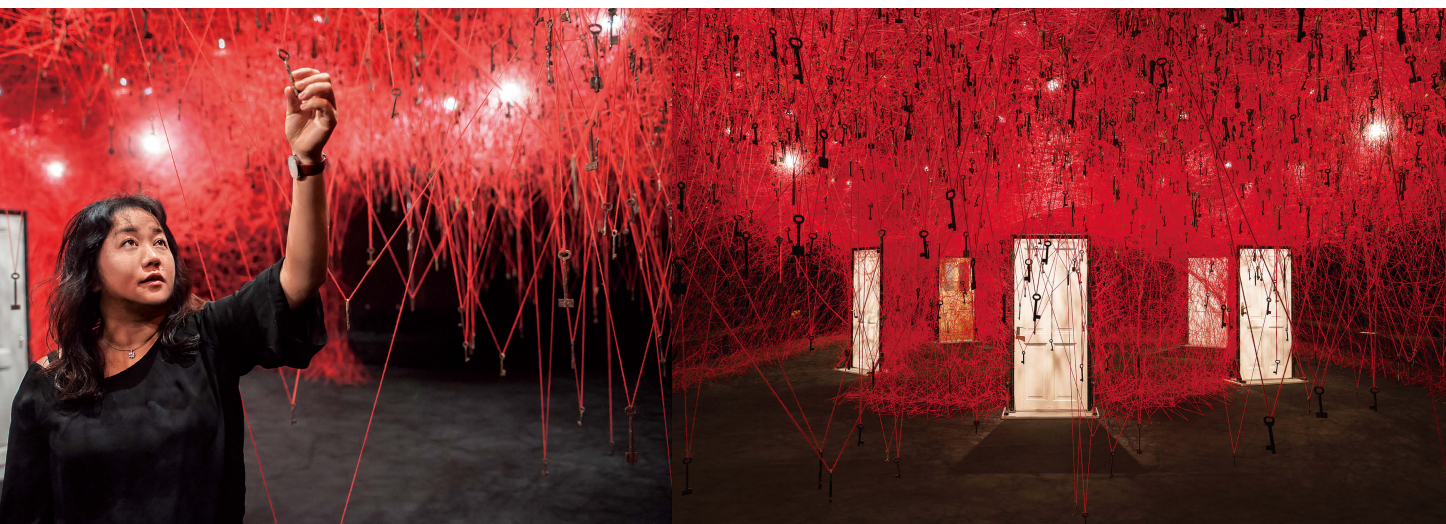
鍵は、生活に密着しているもので、人がもっているものの中でも大切なものです。その上、鍵という言葉にはたくさんの意味があります。物理的な「錠」の意味だけでなく「鍵を握る」とか「チャンスをつかむ」のような。しかも鍵は簡単には人に託せないですよね。信頼の上で受け渡しをする。すなわち人とのつながりの確かさを見極めるようなアイテムでもあります。鍵を通じて、未来を託したり、責任を託したり、大人が次の世代に様々なものを託してい

く、そんなイメージを作品に込めています。

また作成過程で感じたことですが、鍵の形ってどこか人間の形に似ているんですね。作品に使用した18万個もの鍵は、文字通り世界中の方から提供いただいたものですが、すべて使い古されたものなわけですから。それらの鍵1つ1つに残る記憶を編むような、赤い糸で人と人とをつなぎ、結び合わせていくような気持ちになりました。

赤い糸は、1巻75メートルのロールを3千個使用しています。赤であることは、やはり血液の赤であると同時に、運命の赤い糸、すなわち縁のような意味もあります。大量の鍵が赤い糸を介して星のように、まるで宇宙空間のように散らばっていて、私の体内にある宇宙と、外の宇宙とをつないでくれているようにも感じます。

そして、2艘の舟は両の掌の象徴。降り注ぐ「鍵」を受け止める役を担っています。舟は前進するもので、方向性があります。2015年のヴェネチア・ビエンナーレのタイトルが「全世界の未来」だったこともあり、一人一人の向かう方向や未来というものを表しました。



——心に湧いたイメージをどう形に？

私は絵画から入ったので、インスタレーションをつくる際にもまず絵が浮かびます。しかし作品の設計図などをあまり細かく描いてしまうと、そこでイメージが固定してしまい、結局はアイデアが潰れてしまうんです。私の場合、描いたもの以上の作品には決してならないんですね。ですから、心に何かイメージが湧いたら、ざーっと大事にあたためておくんです。あたためて、あたためて、できるだけ描かずにキープしておきます。

難しいのはやはり実際に作品をつくる段階です。材料を集めて実際に構成していく過程においては、やはり自分の中のイメージや感情だけではつくり進められません。材料の重さや照明などの光源、実際に展示するスペースや壁の材質などリアルな条件を考慮しながらつくっていきます。

——作品のテーマはいつ決める？

私の場合、最初に心に浮かぶ作品イメージは「像」でしかなく、「どうしてこの作品をつくりたいのか」は分からないままつくっていることが多いですね。つくり込んでいって、完成間近になるとだんだんと作品の意図が見えてくる。そして完成したときにようやく「あ、私はこういう理由でこういう作品をつくりたかったんだ！」と気付くのです。具体的なテーマを決めてから作品の構想を練るのではなく、心に湧いたイメージを形にする過程で、今の自分に「欠けていたもの」に気付くという感覚ですね。言葉はあとからついてくる。まずは自分の中に湧いたイメージを、目一杯膨らませることが大切だと考えています。

参考：塩田千春『鍵のかかった部屋』特設サイト
http://www.kaat.jp/d/shiota_kagi

日文の教科書
ラインナップ

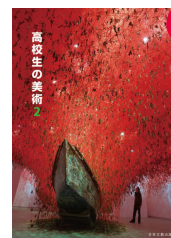
文部科学省検定済教科書



高校生の美術 1

116 日文 美 I 305

著作者 村上尚徳 横田学
安田淳 中村美知枝
末房貞樹 三井直樹
橋本典久



新版 高校生の美術 2

116 日文 美 II 304

著作者 村上尚徳 横田学
安田淳 中村美知枝
末房貞樹 三井直樹
中野滋



高校美術 1

116 日文 美 I 302

監修者 永井一正 木島俊介
著作者 原研哉 近藤幸夫
末房貞樹 中野滋
宇野義行 内藤正人
三井直樹 橋本麻里



高校美術 2

116 日文 美 II 302

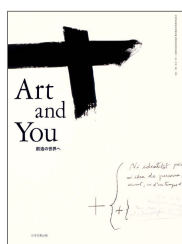
監修者 永井一正 木島俊介
著作者 原研哉 近藤幸夫
末房貞樹 中野滋
宇野義行 内藤正人
三井直樹 橋本麻里



高校美術 3

116 日文 美 III 302

監修者 永井一正 木島俊介
著作者 原研哉 近藤幸夫
末房貞樹 中野滋
宇野義行 内藤正人
三井直樹 橋本麻里



Art and You 創造の世界へ

116 日文 美 I 303

著作者 小澤基弘
高須賀昌志
鈴木康広
田島達也



工芸 I

116 日文 工 I 301

監修者 小松敏明
著作者 長濱雅彦
川野辺洋



工芸 II

116 日文 工 II 301

監修者 小松敏明
著作者 長濱雅彦
川野辺洋

平成30年度版 内容解説資料
 掌の鍵 赤い糸をつむぐ——塩田千春

116
日文 教科書記号・番号

高校生の美術 2 美 II 304

編集/デザイン：有限会社リンカーベル ポートレート撮影：高橋和海
 この内容解説資料は、植物油インキと再生紙を使用しています。
 本書の無断転載・複製を禁止いたします。
 CD22157 2017年4月作成

日本文教出版 株式会社
<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
 TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
 TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
 TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18F・B
 TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
 TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690